

ワクチン接種とアナフィラキシー 広報げろ 2021.5

ワクチン接種とアナフィラキシー

日本アレルギー学会ではアナフィラキシーを「アレルギー等の侵入により、複数臓器に全身性にアレルギー症状が^{じょうき}惹起され、生命に危機を与える過敏反応」と定義し、アナフィラキシーショックとはアナフィラキシーに血圧低下や意識障害を伴う場合としています。

アレルギー反応はどのように起こるかによってⅠ～Ⅳ（Ⅴ）型の4（5）種類に分類され、花粉症、食物アレルギー、喘息、アトピー性皮膚炎、アナフィラキシーなど、一般的にアレルギーといわれるものは、Ⅰ型となっています。Ⅰ型アレルギーでは、アレルギー（抗原）が体に侵入してから早ければ15分～30分ほどでアレルギー反応が起こるため「即時型」アレルギーとも言われています。

アナフィラキシーの原因は食べ物がもっとも多く、続いて蜂などの昆虫、ペニシリンやアスピリン、検査で使う造影剤、局所麻酔剤などの薬物などです。原因の検査をしても特定できず、原因不明となる場合も少なくありません。

ワクチンもアナフィラキシーの原因（アレルギー＝抗原）となりえます。日本で定期接種が行われているワクチン類はBCG、麻疹、風疹、水痘、百日咳、ジフテリア、破傷風、ポリオ、日本脳炎、インフルエンザ菌b型（Hib）、肺炎球菌、インフルエンザ、ヒトパピローマウイルスなどです。これらのワクチン接種によるアナフィラキシー発生は非常にまれで、100万人に1人程度の頻度とされています。

ワクチンでアレルギーとの関連が報告されているのは、ワクチン主成分、安定剤のゼラチン、防腐剤のチメロサル、培養液、鶏卵成分、抗菌薬などです。

日本におけるアナフィラキシーによる年間死亡者数は2019年に62名に上りました。（厚生労働省）原因は、不明なことが40人と最も多く、続いて、ハチ毒関係、薬物、食物などとなっています。しかし、現在までワクチンによる死亡例は報告されていません。

アナフィラキシーは、アレルギー（抗原）が体に入って数分から数時間後、次の症状のうち二つ以上が突然現れた場合にアナフィラキシーと診断します。

- ① 皮膚粘膜症状（^{じんましん}蕁麻疹、かゆみ、皮膚が赤くなる、唇、舌、口の中が腫れる）
- ② 呼吸器の症状（息切れ、せき、ゼーゼー、ヒューヒューする）。
- ③ 消化器症状（強い腹痛、嘔吐）
- ④ 血圧の低下、倒れる、失禁する。

厚生労働省はQ&Aの中で、ワクチン接種の可否について「食物アレルギー、気管支喘息、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎や花粉症、^{じんましん}蕁麻疹、アレルギー体質などがあるといった理由だけで、接種を受けられないわけではありません。また、接種するワクチンの成分に関係のないものに対するアレルギーを持つ方も接種は可能です。ただし、これまでに、薬や食品など何らかの物質で、アナフィラキシーなどを含む、重いアレルギー反応を起こしたことがある方は、接種直後に調子が悪くなったときに速やかに対応ができるよう、接種後、通常より長く（30分間）、接種会場で待機していただきます。」としています。

いずれにしてもワクチン接種によるアナフィラキシーをはじめとする副反応については世界における経験を参考に充分対応可能であろうと考えられます。ワクチンを接種することの利益は摂取しないことの不利益を大きく上回ることを十分にご理解いただいたうえで、接種の可否は自分で決めましょう。

下呂市立金山病院 顧問 古田智彦